

## 米国の研究者は日本の保育文化をどのように捉えているのか？ — 子どもの社会化に着目して —

濱名 潔<sup>1</sup>・保木井啓史<sup>1</sup>・中坪 史典<sup>2</sup>

### How Do US Researchers Recognize Japanese Culture of Early Childhood Education and Care? — Focusing on Socialization of Children —

Kiyoshi HAMANA<sup>1</sup>, Takafumi HOKII<sup>1</sup>, Fuminori NAKATSUBO<sup>2</sup>

**Abstract:** This study clarifies how do US researchers recognize Japanese culture of early childhood education and care and consider the significance of Japanese culture of early childhood education and care through reviewing 5 US studies that focused on socialization of children at Japanese nursery school. As a result, US researchers recognize Japanese culture of early childhood education and care as follows. First, White & LeVine (1986), Walsh (2004), and Tobin (1992) recognize values of socialization of children in Japan as not adapting children to group life but instilling them selfhood of “omote” and “ura”. Second, White & LeVine (1986) recognize Japanese childcare method encouraging the socialization of children is “Love-oriented techniques”. And they recognize this method influenced by Japanese implicit educational theory, such as “pamper”. Third, Tobin (1992) and Walsh (2004) recognize that the environments of space, time, and word in Japanese nursery school are influenced by Japanese implicit values, and lead socialization of children. Fourth, Burdelski (2010, 2013) recognize the socialization of children in Japan is accomplished from the step of “socialization to use word” to “socialization thorough the use of word”. As a conclusion we reveals the following: in Japan, socialization of children is about the value, is done by the children themselves to accumulate experience in life. On the other hand, socialization of children is about social skills related to interpersonal relationships is done by direct guidance of teachers.

**Key words:** Japanese culture of early childhood education and care / socialization of children / US researchers / literature review

## 1. 問題と目的

### 1-1. 異文化の視点から日本の保育文化を理解 することの意義

異文化の視点から自身の文化を理解することは、自身の文化の再発見につながる。例えば、日本の交差点において、外国の人々は「どうして日本人は、車が来ないのに信号を待つんだ!？」と不思議に感じるという(鴻上 2015)。しかし、

日本人は、そのような行為に対して不思議に思うことは少なく、異文化の視点からの指摘を受けて、こうした行為の背後にある自身の文化の自明性によりやく気づくことができる。このように、文化を反映するような現象の多くは、日常生活の中で習慣化されており、人々の意識にのぼることは少ない(森 2007)。したがって、日々の生活における実践について、人が自身の依っている文化を理解するには、自身と異なる背景を持つ人たちの視点に立つことが有効である(Rogoff 2003/2006)。

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

2 広島大学大学院教育学研究科

これは、日本の保育文化を理解する上でも同様である。日本人が、異文化の視点から我が国の保育文化を理解することは、日本の保育文化の意義や価値の再発見につながるであろう。なお、本研究では保育文化を「乳幼児の生活をより充実させ、心身の健全な発達を培うための保育の営みとその所産」(是澤 2010)と定義する。

## 1-2. 日本の保育文化を理解する手がかりとしての子どもの社会化

異文化の視点から日本の保育文化を理解する上で、子どもの社会化に着目する。本研究における社会化とは「ほかの人々との社会的な相互作用を通して、ある社会や集団における生活を送る上で必要な行動パターンや知識、技術、価値、動機などを習得し、内面化していく過程」(佐藤 2006)と定義する。

本研究が子どもの社会化に着目する理由は、次の二点である。第一に、子どもの社会化の内容や方法は、その文化が保有している行動・価値体系に規定される(森 2007)。そのため、日本の保育における子どもの社会化に着目し、検討することが、その背後にある、日本の保育文化を理解することの手がかりになる。

第二に、子どもの社会化は、大人の情動的な働きかけを含んだ、具体的なやり取りの中で達成される(Valsiner 2007/2013)。また、そのさい、大人のアプローチは、各国の文化によって異なる(ルイス・須賀 2005)ため、日本の保育施設における子どもの社会化への着目が、保育者と子どもの相互作用という観点からも日本の保育文化の理解につながる。

## 1-3. 先行研究検討：米国の研究者は日本の保育文化における社会化をどのように捉えてきたか？

異文化の視点から日本の保育文化を捉えた研究は、Burke & Duncan (2015)のように、一部ニュージーランドの研究者の知見があるものの、多くは主に米国の研究者によって蓄積されてきた<sup>注)</sup>。特に、Peak (1991)やLewis (1995)の研究は、日本人が「あたりまえ」と通り過ぎてしまいそうな保育場面を詳細に記述しており(Holloway 2000/2004)、日本の保育文化の概要を知る上で有用である。例えば、Peak (1991)やLewis (1995)は、日本の保育施設が暗黙裏に有している、育成すべき子ども像としての保育目標と、それを実現するための保育方法を明らかにした。それらの研究によれば、日本の保育施設では、子どもに集団の中で思いやりや責

任感を持ち、問題解決能力を身に付けさせることを目標に保育が行われている。また、保育者の関わり方としては、子どもに責任感や問題解決能力を身に付けさせるために、集団生活を数多く経験させる方法を用いている。言い換えれば、日本の子どもは、集団生活の中で様々な葛藤を感じ、問題解決のための様々な方法を学びながら(Lewis 1995)、友達と一緒にいる楽しさや集団行動の基準を理解していくのである(Peak 1991)。

他方で、Holloway (2000/2004)はPeak (1991)やLewis (1995)とは異なり、日本の保育施設の多様性に注目している。日本の保育施設での子どもの社会化に関する保育目標や保育者の子どもへの関わり方が各園によって異なり、それは、園の信念や園での習慣を意味する、次のような文化モデルによって規定されることを示唆する。

「集団関係志向的」な文化モデルの園では、集団生活を通して、子どもに仲間との関係を形成する能力を身に付けさせたり、園での生活習慣を学ばせたりすることを目標としている。そこでの保育者は子どもに対して親しみがあがり、穏やかで、非権威主義的に振る舞い、温かな関係を築こうとする。

「役割志向的」な文化モデルの園では、子どもが漢字を読むこと、ひらがなを書くこと、パターン認知、記憶の訓練、楽器の演奏、絵の描き方などを学習することに保育目標の主眼が置かれており、そこでの保育者は厳しいしつけの方略を用いる。

「子ども志向的」な文化モデルの園では、大部分の時間を子どもの自由遊びに使う。集団で活動する時間が多少あるが、直接的教示はほとんどない。保育者は家庭での「甘え」の関係を、集団場面に適用している。

これら、Peak (1991)、Lewis (1995)、Holloway (2000/2004)の研究は、保育目標や保育者の振る舞い方の点から日本の保育文化を照射する上で有用であるものの、次の四点の課題が存在する。

第一に、子どもの社会化の価値として、集団生活のみが中心的に扱われている点である。すなわち、1980年代頃、米国では「日本人=集団主義」という先入観が通用していた(青木 1999)との指摘に基づけば、Peak (1991)、Lewis (1995)も、その先入観に少なからず制約された分析を行っていることが伺えよう。したがって、集団

主義以外の観点から照射された日本の保育文化の理解も必要である。

第二に、Peak (1991), Lewis (1995), Holloway (2000/2004) は、日本の保育方法を詳細に描写する一方で、その保育方法を規定している考えとは何かというような観点からの言及は見られない。

第三に、子どもの発達には環境が大きな影響を与えることから、子どもの社会化について、保育者の保育方法だけではなく、保育施設的环境からの理解も重要である。そのさい、Holloway (2000/2004) のような園単位の理解だけでなく、日本の保育施設に通底する環境のありかたは何かという観点での検討が必要である。

第四に、保育者との相互作用によって、どのようにして、子どもが価値や能力を内面化していくのかという過程について、十分検討されているわけではない。

#### 1-4. 本研究の目的

そこで本研究では、米国の研究者による、日本の保育における子どもの社会化に言及した論文をレビューすることで、米国の研究者が日本の保育文化をどのように捉えているのかを検討する。そして、このレビューを踏まえて、日本の保育における子どもの社会化と、日本の保育文化の意義について考察する。そのさい、先行研究の課題を踏まえて、2つの研究を設定する。

研究1では、日本の保育における子どもの社会化に関係する価値観、及び保育方法に共通する特性、保育環境などについて、米国の研究者がどのように捉えているのかを明らかにする。

研究2では、保育者との相互作用により、子どもが価値や能力を内面化していく様相について、米国の研究者がどのように捉えているのかを明らかにする。

これにより、私たちが気づかないような観点から、日本の保育文化を包括的に理解することが期待できる。

## 2. 論文選定の手順

研究1, 研究2で対象とする論文について、それぞれ次の手順で選定した。なお、本研究では、米国の研究者の視点から日本の保育文化を理解するために、米国人著者の論文に限定した。

### 2-1. 研究1の論文選定の手順

研究1では、日本の保育における子どもの社会化に関連する価値観、及び保育方法に共通す

る特性、保育環境などから理解するために、White & LeVine (1986), Tobin (1992), Walsh (2004) の論文を対象にした。その理由は、次の二つである。一つは、Lewis (1995) や Holloway (2000/2004) などの米国の研究者が、日本の保育文化や制度を論じる上で、三者の研究を参考にしていることである。

二つは、日本の保育を、集団生活とは異なる視点で論じているためである。したがって、Peak (1991), Lewis (1995), Holloway (2000/2004) の研究とは異なる観点からの、日本の保育文化の理解に資することが期待できる。

### 2-2. 研究2の論文選定の手順

日本の保育において、保育者との相互作用によって、子どもが価値や能力を内面化していく社会化の様相を検討するため、Burdelski (2010) と Burdelski (2013) を対象にした。まず、2015年12月10日に引用索引データベースの Web of Science を使用して文献収集を行った。検索条件として第一に、日本の保育における子どもの社会化を対象にした論文を抽出するため、検索キーワードを「“socializing” and “Japanese”」とした。第二に、米国の研究者の論文を抽出するために、論文の記述言語を「ENGLISH」に設定した。第三に、検索範囲を過去10年以内(2006～2015年)とした。結果、37本の論文がヒットした。そして、その中から、保育を対象としない論文15本と、著者に日本人が入った論文18本を表題や抄録などの精査により除外した。その結果、Burdelski の論文4本が残った。その中でも、具体的なやりとりの分析を通して社会化の一端を明らかにしていると考えられる Burdelski (2010) と、日本の言語的特徴の一つである“敬語”の社会化に着目した Burdelski (2013) を対象とした。

## 3. 〈研究1〉米国の研究者が捉えた日本の保育における社会化一価値観、保育方法の特性、保育環境からの検討一

### 3-1. 望ましい社会化の価値観と社会化を促す方法とその教育理論— White & LeVine(1986)

White & LeVine (1986) の“*What Is an Ii ko (Good Child)?*” は、『*Child Development and Education in Japan*』という2部構成の書籍の第1部「BACKGROUND」に収録の論文で、日本語の語彙の分析を通して、子どもの社会化に関する日本の暗黙の「教育理論」を描き出すことが試みられている。

具体的な内容は以下の通りである。まず、彼女らに先んじて日本の保育を英語圏に紹介した文献である、Shigaki (1983) と、Lewis (1984) から、使用されている語彙を二つの基準で抽出した。第一は、「子どもの発達への社会的な期待」である。「いい子」および、その具体的要素を構成しているとされる、「おとなしい」「素直」「明るい」「元気」「ハキハキ」「お利口」が抽出された。第二は、「子どもの発達に有用とされる観念」の反映としての、「子どもの行為の性質を記述している用語」である。(子どもが)「頑張る」「我慢する」「反省する」、(大人が)「甘やかす」「分からせる」「理解させる」が抽出された。

次に彼女らは、上記の語彙から、子どもの発達と社会化の働きかけに関する「概念枠組み」を論じ、それを米国の文化的背景からの違和感との対比によって意味づけた。すなわち、第一の基準の語彙は、米国の者には、いっけん、「従順」「自主性の欠如」などネガティブな意味に感じられる。しかし、日本における「いい子」像が(特に、「素直」の含意の重点的検討より)、他者と協調し、社会で力を発揮できる子であることを考慮すれば、「いい子」にとって個人の自己実現と人々のつながりは矛盾しないと彼女らは指摘する。

第二の基準の語彙からは、そうした「いい子」の実現のための教育理論が導き出される。White & LeVine が特に指摘するのは、子どもが自ら規律に従う(「頑張る」「我慢する」「反省する」)ことを促す技術として、「甘やかす」が位置づく点であった。彼女らはこれを、社会化の「愛情志向的技術」であるとし、西欧的な「権力-断定的方法」を旨とする感覚からは、矛盾に感じられるというのである。

では、日本の文化的状況を日常としている我々は“*What Is an Ii ko (Good Child)?*”から、どのような示唆を得ることができるのだろうか。Lewis (1995) や Peak (1991), Holloway (2000/2004) は、日本の保育施設で確認された集団生活に関する保育方法を提示したのに対し、White & LeVine は、集団生活とは異なる価値観にも着目して子どもの社会化に関する「愛情志向的技術」を中心とした日本の暗黙的教育理論を明らかにした。

また、社会化の技術として「甘やかす」を位置付けた点は、例えば鯨岡・鯨岡 (2001) が、子どもの気持ちを「受け止め」、*「信頼関係」*を

構築することが園で子どもの育つ土台だと論じたように、語彙は違えど、今日の日本の保育で語られる観念である。

### 3-2. 子どもを取り巻く文化的絞り込み—Walsh (2004)

Walsh (2004) の“*Frog Boy and the American Monkey: the Body in Japanese Early Schooling*”は、『*Knowing Bodies, Moving Minds*』という書籍(これは日本の保育ではなく、教育における身体を多方面から論じた文献である)の1つの章を成す論文である。

Walsh は、文化心理学の立場から、「文化的絞り込み」の理論に基づいて発達のプロセスを描き出した。すなわち、人々に共有された価値観は、子どもを取り巻くさまざまな環境に反映されて、生活のあり方に影響を与えている。そのため、特定の文化の中では、発達のある側面が容易になり、別の側面は難しくなるという。前節の White & LeVine が、期待されている社会化のあり方を論じたのに対して、その期待と子どもを取り巻く環境の対応を論じたのが Walsh である。

Walsh は、自身の2002年の論文において、日本の文化的信念として、子どもの「身体発達」への価値づけを見出していたが (Walsh 2002)、この論文 (Walsh 2004) では、兵庫県の幼稚園・保育所5園を中心とした8か月間のフィールドワークと、彼の2人の子どもの日本での生活をもとに、子どもを「身体発達」へと向かわせる、さまざまな「文化的絞り込み」を例示している。

Walsh が描き出す社会化のプロセスは、以下の通りである。第一に、「身体発達」への価値づけが人々の間に共有されている。それは例えば、保育施設では、室内での走り回りに目くじらを立てない保育者の姿などに、施設外では運動会への近隣ぐるみでの盛り上がりなどに見てとれる。第二に、子どもたちもまた、その価値を取り込み、身体活動における優越を願うようになる。第三に、保育施設の設備などや、「元気」であることへの保育者の賞賛など、子どもを取り巻く物的・人的環境にもその価値観は反映され、子どもの身体活動を後押しする。Walsh は、日米の保育施設を比較して、保育室の広さや物品は大差ないのに、園庭に関しては日本の方が広く、使える物品も多様であり、日本の園庭はさながら「身体に関する発見と驚きのための研究所」であると評している。このように、身体活動における優越を願う子どもと、それを後押

しする道具立てがあるため、第四に、多くの子どもが身体的な達成を遂げるのである。Walshは、補助板の後押しにより、ほとんどの子が鉄棒を回れるなどを挙げている。

“Frog Boy and the American Monkey”では、上記に紹介した以外にも「雑多」とも思える様々な事象への言及がある。例えば、公園での風景、学校の遠泳大会、冬場の薄着、さらには東京の地下鉄でのサラリーマンの仕草（疲れた足をマッサージしていたという）といった具合である。日本の文化的状況を日常としている我々が本論文から受ける示唆は、「雑多」な事象が、一定方向への子どもの社会化に寄与する一連の道具立てとして関連付いて理解し直される点であろう。そのさい、冬場の薄着やサラリーマンの仕草までも特段の注意を向けて対象化しえたのは、米国の研究者であるWalshの、異文化の視点からの違和感や驚きに依るところが大きいと考えられる。

また、「文化的絞り込み」理論の面白さは、子どもの社会化が、文化的装置によって、個々の大人の意図と関係なく促される様相を明らかにする点である。例えば、Walshも言及した園庭の物品や固定遊具は、従前よりのあり方が習慣的に維持されていること多いと考えられる。そこに「文化的絞り込み」が反映しているとすれば、日本の保育施設では、たとえ個別の保育者が運動の指導などを不得手としていても、やはり子どもは「身体発達」へと社会化されるのである。

### 3-3. 自我の「表」と「裏」への社会化を促す保育施設的环境—Tobin (1992)

前述のWhite & LeVine (1986)は、日本語の「いい子」の含意の検討の中で、日本の子どもに期待される自我のあり方にも言及していた。子どもの自我の社会化の仕組みを、日本の保育実践の場で、空間、時間、言葉などの環境的観点から論じたのがTobin (1992)の“Japanese preschools and the pedagogy of selfhood”である。

Tobinは、日本の保育施設における乳幼児の文化的に適切とされる自我の発達のための援助の在り方について検討している。Tobinの主張は、日本の保育施設の空間や時間などの構造に、「表」と「裏」のふるまいに関する価値観が反映されており、子どもの自我の社会化に影響を与えるという点にある。なお、Tobinは、日本人の自我について、土居(1985)を参考にしており、「表」を建前などの自我の公的な側面、「裏」

を本音などの自我の私的な側面としている。土居(1985)によれば、日本の社会生活は「表」と「裏」が相補的に機能して成立しており、日本人は、大人になるにつれて、その2つの世界を結合できるようにするという。

Tobinは、子どもの自我の「表」と「裏」を育む日本の保育環境を、空間的環境、時間的環境、言葉環境に分けて紹介している。空間的環境に関して、例えば、保育施設の空間の一つである玄関は、「表」である外から「裏」である保育室に入るさいに、外靴から上靴へと履き替える場所である。すなわち、靴の履き替えは、空間の分割を通して、子どもの「表」と「裏」の感覚を育む機会となる。

また、日本の保育施設における時間的環境も、子どもの「表」と「裏」の感覚を育む。例えば、体操、ワークブックのような、保育者の設定した活動は「表」の時間であり、一方で、朝の遊びや、午後の園庭での自由遊びなどは、子どもに制約のない喜びと、制約のない雰囲気限界を広げる「裏」の時間である。また、園の式典などの行事は「表」の時間であり、日常の保育での生活は「裏」の時間として捉えられるのである。

言葉環境に関して、日本の保育施設には子どもに丁寧な言葉遣いが求められる場面とそうでない場面が存在する。そして、そのような環境での経験が、子どもの自我の社会化に寄与するという。例えば、Tobinが観察した園では、昼食前には日常的に「お父さん、お母さんありがとうございます」という丁寧な言葉遣いが求められる場面が設定されている。そして、そのような場面では、子どもの自我の「表」の社会化が促されるのである。一方で、丁寧な言葉遣いを求められない場面において、日本の子どもは大人に干渉されずに下品で不作法な言葉を用いる。そして、子どもはこのような経験を積むことで、自我の「裏」の社会化が促されるのである。

以上のTobinの研究は、子どもの社会化を保育者の子どもへの関わり方(Peak 1991, Lewis 1995)ではなく、保育環境という観点から検討しているため、日本の保育文化における保育環境の意味を理解する上で有用である。もちろん、Tobin(1992)以前の米国の研究者も、保育環境への言及を行っていたが、Tobinの研究は、保育環境を空間的環境、時間的環境、言葉環境に細分化して検討したうえで、それらが全体として、

子どもの自我の社会化を特定の方向へ仕向けている点に興味深いと言える。

#### 3-4. 小括

ここまでの議論から、日本の保育における子どもの社会化に関する価値観、方法の背景にある教育理論、保育環境は、次のように整理される。日本の保育における子どもの社会化に関する価値観には、Peak や Lewis が指摘する、子どもが集団の中で思いやりや責任感を持ち、問題解決能力を身につけるといった価値だけではなく、「元気」などのような身体的発達に関する価値 (Walsh 2004) や、自我における「表」と「裏」に関する価値 (Tobin 1992) も含まれていた。そして、子どもの社会化を促す保育方法の1つとして、「甘やかす」などの「愛情志向的技術」(White & LeVine 1986) が確認された。加えて、保育施設の空間的環境、時間的環境、言葉環境といった環境の特性も、子どもの自我の、特定の方向への社会化に寄与していたことが示唆された。

他方、子どもを取り囲む物事の社会的な意味づけは、情動的な働きかけを通じて具体的なやり取りのなかで伝えられるものである (Valsiner 2007/2013)。したがって、子どもの社会化の理解には、大人と子どもの相互作用という観点から捉えるアプローチも必要であると言える。そこで、研究2では、日本の保育施設における子どもの社会化を、保育場面における保育者と子どもの具体的なやり取りを言語学的見地から俎上に乗せている米国の研究者である、Burdelski の研究をレビューし、その意義を検討する。

#### 4. 〈研究2〉米国の研究者が捉えた日本の保育文化における子どもの社会化—子どもが価値や能力を内面化していく様相からの検討—

研究2では、Burdelski (2010) と Burdelski (2013) のレビューを通して、子どもと大人の相互作用という観点から、日本の保育施設における子どもの社会化に関する、子どもが価値や知識などを習得していく過程の意義を検討する。

##### 4-1. 保育者からの言葉の繰り返しによる子どもの社会化—Burdelski (2010, 2013)

Burdelski (2010, 2013) の論文は、それぞれ日本の保育施設における「礼儀正しさの定型所作 (Politeness routines)」や敬語使用の社会化について検討している。

Burdelski (2010) は、保育者の言語と非言語

の両方の援助を分析し、子どもがどのように「礼儀正しさの定型所作」を身につけるのかを検討している。「礼儀正しさの定型所作」とは、社会的な場で自身が他者に好意的に思われるために用いる体面、すなわち、他者に向けられる公的な自己イメージを形成するための体面の決まった型である。例えば、子ども間でのモノの貸し借りにおける「貸あして」「はいどうぞ」「ありがとう」のようなやり取りがそれにあたる。

Burdelski によれば、日本の保育施設では、子どもに礼儀正しさを身につけさせるために、はじめに保育者が子どもに身体的な行動を教える。そして、子どもは、その行動を、繰り返し教えられることで、徐々に身体的な行動が表示する社会的な意味を理解するようになるという。例えば、子どもが友達を押したにも関わらず何も言わないような場合、保育者は、子どもに「ごめんねは？」と謝罪を促す言葉を繰り返し言って、友達に「ごめんね」と言わせる。子どもは、保育者に「礼儀正しさの定型所作」を求められる経験を重ねることで、「ごめんね」という所作の獲得のみならず、次第に自分が悪いことをした時は謝るべきであるという価値観を身につけていくのである。

また、Burdelski (2013) は、子どもの敬語使用の社会化の過程についても、養育者（保護者や保育者）の援助の観点から検討している。それによれば、養育者が子どもに敬語を用いるさいには、自分と相手の立場が異なることを教える。そのため、子どもは敬語使用の社会化によって、公的な表現と社会的役割が関係していることも学習するという。例えば、2歳児のマオとカナのごっこ遊びの中で、マオがカナの家に何も言わずに入ってくると、保育者が「お客さんなのだから、おじゃましますは？」と促した場面がそれにあたる。

Burdelski は、敬語が保育施設のごっこ遊びで用いられる際には、遊びに登場する社会関係の表示として活用されると指摘する。すなわち、保育者がマオに促した「おじゃまします」は、マオに、自身とカナの社会的立場が異なることを指摘するものである。そのさい保育者は、マオに「お客さんなんだから」という理由を伝えて、敬語を使用する理由も説明するのである。このことが、公的な表現と特別な社会的役割との関係の学習としても機能することになる。すなわち、子どもの敬語使用の社会化に関する保育者の敬語使用が、子どもの敬語使用それ自体

のみならず、フォーマルな場でのふるまいに対応する公的な自我の形成や、日本の文化的背景に対応した社会的役割の理解にもつながるのである。

#### 4-2. 小括

以上より、Burdelski の論文 (2010, 2013) で検討された子どもの「礼儀正しさの定型所作」や敬語使用の社会化では、まず保育者が子どもに言葉の使い方を教えていき、子どもは保育者に教えられた言葉の使い方を身につけていくことで、次第に善悪の価値観や公的な自我といった、いわゆる内面に渡る社会化がなされていくという点で共通していた。つまり、日本の保育施設における子どもの社会化は、「言葉を使うことの社会化」から「言葉の使用を通じた社会化」という過程を経てなされるのである。Burdelski が明らかにしたこのような社会化の過程は、Peak (1991) や Lewis (1995), Holloway (2000/2004) の研究が示す、保育者の保育方法と子どもの社会化の因果関係の部分をより詳細に描いており、我々に子どもの社会化が段階的に達成されることを示唆するのである。

### 5. 総合考察と課題

本研究では、米国の研究者の日本の保育における子どもの社会化に関する論文をレビューし、米国の研究者が日本の保育文化をどのように捉えているのかを検討した。その結果、次の四点が明らかになった。第一に、White & LeVine (1986), Walsh (2004), Tobin (1992) は、日本の保育施設では子どもの社会化に関して、子どもの集団生活への適応以外に、身体的発達 (White & LeVine 1986, Walsh 2004) や、自我の「表」と「裏」(Tobin 1992) への価値づけも存在すると捉えている。

第二に、White & LeVine (1986) は、日本における子どもの社会化を促す保育方法が「甘やかす」であり、そのような背景には、「愛情志向的技術」によって規律などが社会化できるといような暗黙的な教育理論が存在していると捉えている。

第三に、Tobin (1992) や Walsh (2004) は、保育施設の空間的環境、時間的環境、言葉環境および、保育施設を取り巻く環境も子どもの社会化を方向づけており、その方向は日本人の価値観を反映していると捉えている。

第四に、Burdelski (2010, 2013) は、日本における子どもの社会化が、保育者との相互作用

を通して、「言葉を使うことの社会化」(例:「礼儀正しさの定型所作」、敬語の習得)から、「言葉の使用を通じた社会化」(例:善悪の価値観、公的な自我の形成)のように段階的になされると捉えている。

#### 5-1. 日本の保育文化における子どもの社会化に対する考え

これらのレビューの結果から、日本の文化的状況を日常としている我々は、日本の保育文化について、どのような理解が可能になるのだろうか。第一に、White & LeVine (1986), Walsh (2004), Tobin (1992), Burdelski (2010, 2013) の研究をレビューした結果、日本の保育文化の子どもの社会化で身に付けるものが「表」と「裏」の形成 (Tobin 1992) のような価値観である場合、保育者は子どもに直接的な注意をすることは少なく (Walsh 2004)、子どもが自ら規律に従うことを促す (White & LeVine 1986)。すなわち、子どもの社会化は、子ども自身が生活の中での経験を蓄積することでなされる (Tobin 1992)。一方で、「礼儀正しさの定型所作」(Burdelski 2010) や敬語使用 (Burdelski 2013) などの対人関係に関するスキルを身に付ける場合は、保育者が子どもに身体的な行動を教えることで、子どもの社会化がなされる。

日本の保育では、保育者主導の子どもへの一方的な指導ではなく、保育者の環境設定により子どもが自ら能力や態度などを身に付けることが望まれる (文部科学省 2008)。しかしながら、本研究のレビューにより、日本の保育において、子どもが対人関係に関する社会的スキルを獲得する場合には、保育者主導の指導がなされることが明らかになった。

#### 5-2. 日本の保育文化における子どもの社会化の構造

第二に、以上の White & LeVine (1986), Walsh (2004), Tobin (1992), Burdelski (2010, 2013) の研究と、Peak (1991), Lewis (1995), Holloway (2000/2004) の研究の知見を重ね合わせることで、子どもの社会化を通してみた日本の保育文化の構造について、図1のような仮説モデルが構築できると考える。森 (2007) は、Williams & De Gaetano (1985) を引用しながら、文化が食べ物や洋服など他の文化との区別が比較的容易なレベル、経験を重ねることで体得する習慣などのレベル、価値観が伴い、その文化で生きる人々にとっては意識しにくい深層レベ

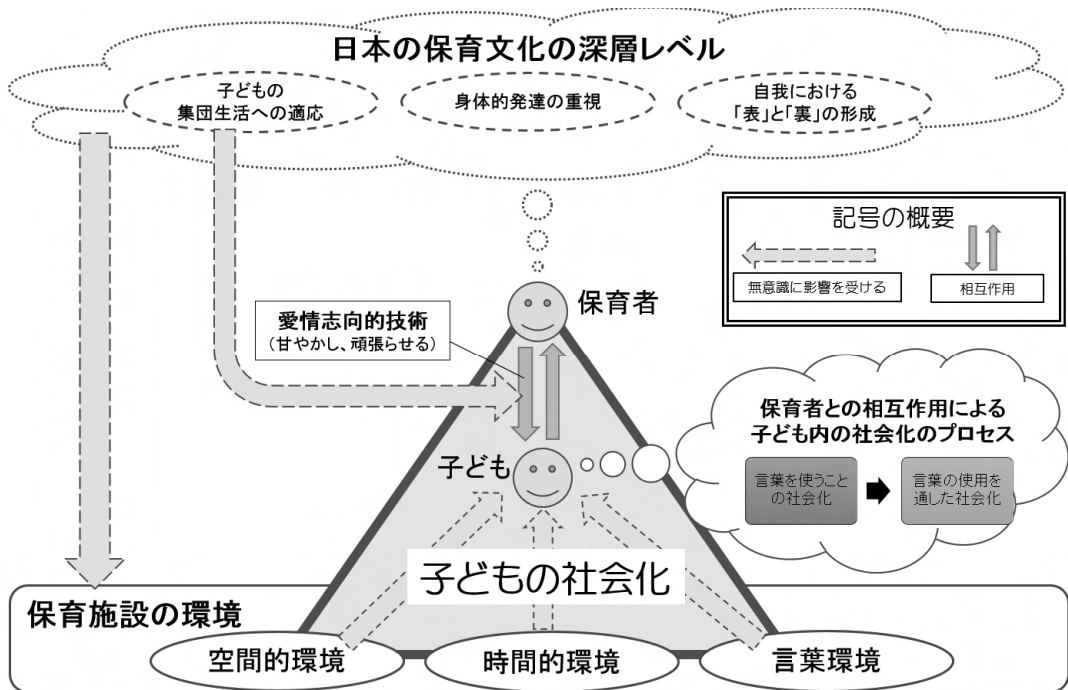


図1 日本の保育文化における子どもの社会化の構造に関する仮説モデル

ルに分けられることを指摘する。これに依拠すれば、「身体的発達の重視」などの価値観は、日本の保育文化の深層レベルに位置する。なぜならば、日本の研究者の中にも、我が国の保育の特色を挙げる者（e.g. 亀谷 2010）もいるが、日本の保育文化における身体的発達の重視などの価値観についての言及が特に見られないためである。

また、人々に共有された価値観が、子どもを取り巻くさまざまな環境に反映されて、生活のあり方に影響を与えるという Walsh (2004) の考えに基づけば、このような日本の保育文化の深層レベルの価値観は、子どもとの相互作用の背後にある教育理論や、保育施設の環境にも反映されていると言える。その例として、子どもの集団生活への適応を促す方法を規定する教育理論としての「愛情志向的技術」(White & LeVine 1986) や、保育施設的环境を通じた「表」と「裏」の自我の形成 (Tobin 1992) が位置づくと言えよう。

すなわち、子どもの社会化は、日本の保育文化の深層レベルの価値観が反映された保育施設の環境、及び保育者との相互作用を通してなされるのである。特に、保育者との相互作用による子どもの社会化は、「言葉を使うことの社会化」から「言葉の使用を通じた社会化」という

段階を経てなされる (Burdelski 2010, 2013) のである。

### 5-3. 日本の保育文化に関する新たな意義

第三に、我々は日本の保育文化に関する新たな意義として、以下の四点を見出すことができる。

一つは、我々が意識していないような、日本の保育文化における価値観が、近年国際的にも注目されている「社会情動的スキル」(OECD・ベネッセ教育総合研究所 2015)に通じる点である。White & LeVine (1986) が、「いい子」像として挙げた、個々の価値—「おとなしい」「素直」などは、確かに現代の感覚では素朴に過ぎるかもしれない。しかし、他者との協調と集団の中での自己の発揮に価値を置く点で「社会情動的スキル」(OECD・ベネッセ教育総合研究所 2015)に通じるものがある。

二つは、保育施設では、保育者が意識的な援助をしなくても、子どもへの社会化が行われている点である。これは、Walsh (2004) による、子どもの社会化が、園庭の物品や固定遊具などの文化的装置によって、個々の大人の意図と関係なく促されるという指摘から示唆されるものである。一方で、この Walsh の指摘は、保育者が子どもに意図的な関わりをしていても、子どもは、保育者が意識していない文化的装置に



よって、保育者の意図とは異なる社会化がなされる可能性を示唆するものでもある。

三つは、Tobin (1992) の研究から、日本の異なる種類の保育環境が、全体として特定の自我のあり方の社会化へと方向づけるように構造化されていることを発見できた点である。

四つは、保育者の子どもへの言葉かけの繰り返し、複数の内容の社会化を促している点である。これは、Burdelski (2010, 2013) の研究が示す、日本の保育施設で、頻繁に見られる言葉かけの繰り返し、子どもの「礼儀正しさの定型所作」や敬語の獲得のみならず、善悪の価値観や公的な自我の獲得に繋がることから示唆されるのである。

#### 5-4. 本研究の意義と課題

これまで、米国の研究者は、日本の保育文化を照射してきたが、集団生活に関する価値観など (Peak 1991, Lewis 1995, Holloway 2000/2004), 部分的な議論に留まっていた。その点について、本研究は、米国の研究者による子どもの社会化に関する論文のいくつかを抽出し、レビューすることで、日本人が気づかないような、日本の保育文化についての包括的な理解と、我が国の保育文化の意義づけに寄与できたと見えよう。一方で、本研究の課題としては、米国の研究者による、日本の保育に関する研究の一部を検討したに過ぎない。そのため、今後はレビュー対象数を増やして、検討する必要がある。

#### 注

筆者らは2015年5月20日に英語の文献や研究の検索サイトであるERICの検索機能を用いて、「日本」に関連する用語(“Japan”や“Japanese”)と保育施設に関連する用語(“kindergarten”, or, “preschool”, or, “nursery school”, or, “early child education and care”, or, “child care”)を組み合わせて検索を実施した。その結果、合計3,544件の論文がヒットした。それらには保育以外を対象とした論文や書評も含まれていたため、「EDUCATIONAL LEVEL」(“Early Childhood Education”, “Preschool”, “Kindergarten”)と「PUBLICATION TYPE」(“Journal Articles”, “Reports Research”)の絞り込みを行った。さらに、重複した論文を除いたところ、55件の論文が残った。これらの論文を筆署名から国籍を予測して分類した結果、[外国人筆者の単著論文](19件)、[日本人と外国人の共著論文](22件)、[日本人筆者の単著論文]

(13件)、[その他](1件)に分類された。[外国人筆者の単著論文]を精査したところ、全て米国の研究者によるものであった。

#### 引用文献・URL

- 青木 保 (1999) 「日本文化論」の変容—戦後日本の文化とアイデンティティ—. 中公文庫. 134-165
- Burdelski, M. (2010) Socializing politeness routines: Action, other-orientation, and embodiment in a Japanese preschool. *Journal of Pragmatics*. **42**, 1606-1621
- Burdelski, M. (2013) Socializing children to honorifics in Japanese: Identity and stance in interaction. *Multilingua: Journal of Cross-Cultural and Interlanguage Communication*. **32**(2), 247-273
- Burke, R & Duncan, J. (2015) *Bodies as sites of cultural reflection in early childhood education (Changing images of early childhood)*. Routledge
- 土居 健郎 (1985) 表と裏. 弘文堂
- Holloway, S. (2000) *Contested childhood: Diversity and change in Japanese preschools*: Routledge, part of Taylor & Francis Books (スーザン D ハロウェイ (2004) ヨウチエン—日本の幼児教育, その多様性と変化—. 高橋 登・南 雅彦・砂上 史子訳. 北大路書房)
- 亀谷 和史 (2010) 日本の保育・幼児教育の特色と今後の方向性—教育学の立場から—. 日仏教育学会年報. **17**, 34-40
- 是澤 優子 (2010) 保育文化. 森上 史朗・柏女 霊峰編. 保育用語辞典 第6版. ミネルヴァ書房. 374-375
- 鴻上 尚志 (2015) クール・ジャパン!?—外国人が見たニッポン. 講談社現代新書. 52-84
- 鯨岡 峻・鯨岡 和子 (2001) 保育を支える発達心理学—関係発達保育論入門. ミネルヴァ書房
- Lewis, C. (1984) Cooperation and control in Japanese nursery schools. *Comparative Education Review*. **32**, 69-84
- Lewis, C. (1995) *Educating hearts and minds: Reflections on Japanese preschool and elementary education*. England: Cambridge University Press.
- キャサリン ルイス・須賀 由紀子 (2005) 心と知力を育む教育の伝統. 土居 健郎・キャサリン ルイス・須賀 由紀子・松田 義幸.

- 甘えと教育と日本文化. PHP 研究所. 146-199
- 文部科学省(2008)幼稚園教育要領解説. フレーベル館. 20-21
- 森 眞理 (2007) 4章 文化って何だろう (文化を読みなおす試み). 小田 豊・森 眞理 編著. 子どもの発達と文化のかかわり—一人一人の子どもにふさわしい保育をめざして—. 光生館. 94-105
- OECD・ベネッセ教育総合研究所 (2015) 家庭, 学校, 地域社会における社会情動的スキルの育成 [http://berd.benesse.jp/feature/focus/11-OECD/pdf/FSaES\\_20150827.pdf](http://berd.benesse.jp/feature/focus/11-OECD/pdf/FSaES_20150827.pdf) (取得日 2016年 2月 5日)
- Peak, L. (1991) *Learning to go to school in Japan: The transition from home to preschool life*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Rogoff, B. (2003) *The cultural nature of human development*. Oxford University Press (B. ログフ (2006) 文化的営みとしての発達 個人, 世代, コミュニティ. 眞眞 千賀子訳. 新曜社. 12)
- 佐藤 郁哉 (2006) ワードマップ フィールドワーク増訂版 書を持って街へ出よう. 新曜社. 178
- Shigaki, I. (1983) Child care practices in Japan and the United States: How do they reflect cultural values in young children?. *Young Children*, 38(4), 13-24
- Tobin, J. (1992) Japanese preschools and the pedagogy of selfhood. R. Rosenberger (Ed.). *Japanese sense of self*. Cambridge: Cambridge University Press. 21-39.
- Valsiner, J. (2007) *Culture in minds and societies: Focusing of cultural psychology*. Sage Publication. New Delhi, London, Thousand Oaks and Singapore (ヤーン ヴァルシナー (2013) 行為における記号フィールド—情緒による内化/外化プロセスのガイダンス. サトウ タツヤ監訳. 新しい文化心理学の構築〈心と社会〉の中の文化. 新曜社. 408-417)
- Walsh, D. (2002) The development of self in Japanese preschools. In L. Bresler & A. Ardichvili (Eds.), *Multiple paradigms for international research in education: Experience, theory, & practice*. New York: Peter Lang
- Walsh, D. (2004) Frog boy and the American monkey: The body in Japanese early schooling. L. Bresler (Ed.). *Knowing bodies, moving minds: Towards embodied teaching and learning*. Dordrecht: Kluwer Academic. 97-109.
- White, M. & LeVine, R. (1986) What is an ii ko (good child)?. H. Stevenson, H. Azuma & K. Hakuta (Eds.). *Child development and education in Japan*. New York: W. H. Freeman. 55-62.
- Williams, L. & De Gaetano, Y. (1985) *Alerta: A multicultural, bilingual approach to teaching young children*. New York: Addison-Wesley. 57-58.

## 謝 辞

本研究の論文の選定にあたり、貴重なご示唆をくださった、Rachael Burke氏（日本学術振興会特別研究員）に心より御礼を申し上げます。また、Matthew Burdelski先生（大阪大学）にも大変お世話になりました。深く御礼を申し上げます。